

第四章 ベンチヴェンニ

コンテ・ヴェルデ号の極東就航

コンテ・ロッソ、コンテ・ヴェルデ姉妹を嚆矢に、ロイド・サバウド社はコンテ・ピアンカマノ号、コンテ・グランデ号(Conte Grande)、一九二八年竣工、二五、六六一総トン)を次々に建造した。イタリアの競合相手、総合イタリア海運社(Navigazione Generale Italiana)も、ほぼ同時期にジュリオ・チェザレ号(Giulio Cesare 二一六五七総トン、一九二二年竣工)、デュイリオ号(Dulio 二四二八一総トン、一九二三年竣工)、ローマ号(Roma 三二、五八三総トン、一九二六年竣工)を建造して対抗した。

他国の海運会社も第一次世界大戦後の復興に着手した。フランスのフレンチ・ライン社(CGT: Compagnie Generale Transatlantique)は一九二一年にパリ号(Paris 三四、五六九総トン)を、次いで二七年にイル・ドフランス号を竣工させた。北ドイツ・ロイド社(Norddeutsche Lloyd)は、第一次大戦前で中断していたコロンブス号(Columbus 一九二四年、三二、三五四総トン)の建造を再開し、一九二三年に完成させた。その運好成績は良好で、さらにブレームン(Bremen 一九二九年竣工、五一、六五六総トン)、オイローパ(Europa

一九三〇年竣工、四九、七四六総トン)を相次いで建造した。大西洋最速横断記録を持つ船に授与されたブルーリボン(Blue Riband)は一九〇九年のモーリタニア号(一九〇七年竣工、三一、九三八総トン、平均二六・〇六ノット)以来、更新されていなかった。しかし一九二九年、二〇年ぶりにブレームン号が平均二七・八三ノットの新記録を樹立、翌三〇年にはオイローパ号が二七・九一ノットで更新し、敗戦国ドイツの復興ぶりを印象付けた。

日本の海運業の状況は、大西洋定期客船の華麗な競演に及ぶべくもなかったが、それでも東洋汽船が天洋丸、春洋丸、大洋丸を太平洋航路に就航させて気を吐いていた。しかし明治末に竣工した三船も老朽化が目立ち、東洋汽船の経営自体も苦しくなっていた。このため一九二六年、日本郵船は東洋汽船旅客部門を救済合併する。そして一九二九年に浅間丸(一六、九四七総トン)、翌三〇年に竜田丸(一六、九五五総トン)と秩父丸(一七、四九八総トン)を竣工させ、サンフランシスコ航路に就航させた。

ロイド・サバウド社はイタリアの威信を背負って、コンテ・グランデ号の一举に倍の規模を持つコンテ・デイ・サヴォイア号(Conte di Savoia 四八、五〇二総トン)の建造に着手する。対する総合イタリア海運社も、ほぼ同規模のレックス号(Rex, 五一、〇六二総トン)を起工した。しかし一九二九年にはじまる世界恐慌の影響で、両社の経営状態は著しく悪化した。イタリア国内企業の再編・国有化に着手したムッソリーニは、一九三二年、ロイド・サバウド社、総合イタリア海運社およびコスリッチ・ライン社(Cosulich Societa

Triestina di Navigazione) を合併し、新たにイタリアン・ライン社 (Italian Line または Società di navigazione Italia) を設立した。コンテ・デイ・サヴォイア号とレックス号も新会社設立とほぼ同時期に竣工する。両船とも初期トラブルに見舞われたが、一九三三年八月、レックス号が平均二八・九二ノットを記録し、イタリア初のブルーリボン・ホルダーとなった。

世界恐慌の打撃は深く、ただでさえ過当競争気味であった各国客船の運好成績はさらに悪化していた。それほどの悪条件にもかかわらず、フランスCGTは採算を度外視して、一九三五年にノルマンディ号 (Normandie、八三、四二三総トン) を竣工、平均二九・九八ノットでブルーリボンを奪った。一方、大戦前からの優秀船や、ドイツから賠償として獲得した大型船を保有していたイギリスは、客船建造競争に出遅れ、一九三〇年によく八万トン級の客船建造に着手する。不況の影響で一時工事が中断するが、三六年、クイーン・メリー号 (Queen Mary、八一、九六一総トン) として完成させ、三〇・一四ノットの新記録を樹立した。¹

なお、これに先立つ三五年、かつてのブルーリボン・ホルダーのモータニア号が解体されている。この際、同船の内装の一部がオークションにかけられた。

一九四一年のフランソア喫茶室改装時、玄関天井の照明に用いられたステンドグラスは、イギリス客船で使用されたものと伝えられる。このステンドグラスがモータニア号のものであるかは不明だが、この頃に世代交代で引退した客船の内装が、古物市場を通じて

日本に届けられたのであろう。

一九三二年のイタリアン・ライン社発足と同時に、コンテ・ロツソ号、コンテ・ヴェルデ号、コンテ・ビアンカマノ号、コンテ・グランデ号はロイド・トリエティノ社 (Lloyd Triestino、現 Italia Marittima) に移籍した。同社は一八三六年設立のオーストリア・ロイド社 (Österreichischer Lloyd) を、一九一九年に戦勝国イタリアが接收し、社名変更したものである。同社は極東、アフリカ、オセアニア方面に航路を持ち、コンテ・ヴェルデ号も極東航路に振り向けられた。

一九三〇年台には欧州くアジア航路の需要が増大しており、オスロ、グダニスク、ブレーメン、ロッテルダム、アントワープ、リバプール、ロンドン、マルセイユ、ジェノヴァ、ナポリ、トリエステ、ベニスから東アジアへの定期船が出ていた。

ロイド・トリエティノ社への移籍に合わせて、コンテ・ヴェルデ号は大掛かりな改装が行われた。一等、二等、三等定員をそれぞれ二五〇名、一七〇名、二二〇名に減らして船室に余裕を持たせた。当初一、八〇〇名近かった三等定員は約八分の一という大幅削減になったが、これは極東方面の旅客需要の小ささ、それと対照的な貨物需要の増加に対応したものだ²。極東航路の定期急行船として配備されたコンテ・ヴェルデ号は、ジェノヴァから、スエズ、ボンベイ、コロンボ、シンガポール、香港を経由し、上海まで二四日間をかけて航海した。

当時の極東航路にはロイド・トリエティノ社のほか、北ドイツ・

ロイド社、イギリスP&O社 (Peninsular and Oriental Steam Navigation Company)、フランスMM社、および日本郵船が定期船を配備していた。コンテ・ヴェルデ号をはじめとするロイド・トリエティノ社の船は、規模、速力、運行頻度、船内設備、サービスにおいて優位に立っていた。ジェノヴァ〜上海間の運賃は、いくつか等級のある一等船室のうち、最も安いもので三九〇ドルであった。³これは一九三三年当時公定為替レートで換算すると一、五二〇円となる。⁴日本まで来る場合は、これに上海〜日本間の運賃が加わる。

日本郵船を利用して、神戸〜ナポリ間を最高級の一等A船室で旅した場合、一九三四年の運賃は九七ポンドであった。⁵公定為替レートの換算で一、六九〇円である。これは今日の価格でどの程度であるうか。一九三三年と二〇〇七年の企業物価指数の比は約七五〇倍であるが⁶、実感として差はもっと大きいとも言われる。因みに創業時のフランスアのコーヒー代は一五銭、現在は五五〇円である。この比率をあてはめると、当時の一、六九〇円は、現在の六二〇万円となる。

トリエステ〜上海間を往復するコンテ・ヴェルデ号に乗り組んだ船員の体験記がある。⁷

ジョヴァンニ・ジョッタ (Giovanni Giotta 一九一〇〜) は、一九二〇年にトリエステの南にある街ロヴィニ (Rovigno、現クロアチア) に生まれた。ジョヴァンニの父は腕のよい漁師で、彼も六歳の時から漁を手伝った。しかし第一次大戦後のイタリア経済は悪化の一途

を辿り、彼の家も困窮の度を加えた。日々の糧にも事欠くようになったため、ジョヴァンニが十四歳の時、トリエステの港湾事務所で電話交換士をしているいとこに頼み、働き口を斡旋してもらった。その結果、幸運にもロイド・トリエティノ社に採用された。そしてコンテ・ヴェルデ号に乗り組んで、トリエステから上海まで往復二ヶ月の旅に出ることになった。ただし、最初の航海で配属された厨房助手の仕事は辛かった。

厨房の仕事は嫌いでした。本当に死んでしまふかと思うほど辛い仕事でした。私は、自分の体よりも大きな鍋を磨いて洗う係でした。その鍋を鋼製タワシで磨くのですが、手袋がないので、タワシが皮膚を切ったり、爪と指の間に刺さったりするのです。だんだんと手や指がボロボロになっていき、何かの感染症にもかかってしまいました。イタリアに戻った時には、下船して、一時療養しなければなりませんでした。

しかしこの航海中、ジョヴァンニは生まれて初めて好きなだけ食べ物を食べることができた。しかも彼には、月給二七〇リラが支払われた。それは今まで見たこともない金額であった。

私は再び船に戻りました。ただ、仕事は船室のボーイに替えてもらいました。ボーイの方が、少なくともきれいですし、しかも働き次第で、たくさんチップをもらえるのです。

私は毎月の給料の全額を、海運協会を通じてロヴィニの実家に仕送りしました。実家はこの金額に仰天して、使い道に困り果てたほどです。お客からもらったチップは、自分のために使いました。寄港地で何着かの服を買い、トリエステに戻って少し高めに売るので。そうすることで、もらったチップの額を増やすことができました。船員としての生活は、私の人生の全く変えてしまいました。第一に、私は未だかつて見たことのない豊富な食糧を、船の中で見ました。あらゆる種類の料理、色、感触、そしてその美味しさ！全てが私にとって驚異でした。第二に、その料理を、いつでも好きな時に食べられるということ。

これはほとんど衝撃でした。これこそが本場の贅沢というものなのでしょう。第三に、あれほど多くのお金を、自分のお金も他人のものも含めて、見たことはありませんでした。航海で得たお金は、私と家族にとって大きな幸せを運んできました。外国の港で買った服をトリエステで売ること、給料に上乗せして収入を得ることができました。その利益だけでも、それ以前の生活で見た全てのお金の額を上回っていました。

一九三九年には、カスタム・メードの高価なスーツ、グレーのコート、それに素敵なボルサリーノの帽子を買い揃えました。それに、シルクのスカーフも買って、大いにお洒落を楽しみました。若い私にとって、初めて揃えたスーツです。大喜びでした。この時、私はそれまでの貧しさのすべてを清算したような気になりました。経済的にも、社会的にも、そして肉体的にも。

そうではありませんか。私の身体は栄養が付き、健康になり、若者らしい気分の高揚を覚えていました。恋人を作ろうとして、何人かの女の子にも近づきました。結局うまくいきませんでした。たが。

航海は往復で二ヶ月かかりました。船には乗客が八百人くらい、船員が三〇〇名ほど乗り組んでいました。船内の娯楽のため、オーケストラもありました。私達船員はサッカーチームを組み、ハーフバックの試合をしました。シンガポールとボンベイでは、上陸して地元チームと試合もしました。

ジョヴァンニはトリエステに戻ると、街のカフェに出入りしてエスプレッソやカプチーノの味を楽しんだ。彼は第二次大戦後に喫茶店を創業しているが、この時の体験が役に立つことになった。

ジョヴァンニは極東航路だけではなく、アフリカ航路の貨物船にも乗り組んだ。一九三九年末、休暇でロヴィニの実家に戻った彼は、後に彼の伴侶となる女性と知り合う。彼女はイーダ (Ida) という一五歳前の美しい少女で、ロヴィニのワイン店の娘であった。彼女の家は自前の葡萄農園を持ち、自宅の地下室でワインを醸造して販売していた。小さな店であったが、そのヴァンテージは評判で、ロヴィニで一番美味しいと言う人もいた。ジョヴァンニはイーダを見た瞬間から恋に落ちる。

休暇はあっという間に過ぎ、私は船に戻らなければなりません。

んでした。こんな素晴らしい生きがいを見つけたばかりなのに。私はロヴィノを発つ前、もう一度彼女に会いに行きました。そして手紙を書いてよいか、彼女に尋ねました。彼女は答えませんでした。いいとも、だめとも。私はそれを彼女の承諾と受け止めました。そして私は船に戻り、香港への航海に旅立ちました。香港で折り返して、イタリアに向けて港から港へ。その復路のもどかしかったこと。

行きに二〇日、帰りに二〇日。昼も夜も私の胸はイーダで一杯でした。なかなか寝つくこともできませんでした。船がトリエステに着くと、私はほとんど走ってロヴィニに戻りました。

当初、イーダの家族は、貧しい家の出身のジョヴァンニとの交際に難色を示した。しかし間もなく彼の勤勉さと誠実さを認め、イーダとの結婚を認めた。一九四〇年二月、二人は教会で結婚式を挙げる。イタリアが開戦し、ジョヴァンニが海軍に召集されたのは、その三カ月後であった。

失われた地平線

前章に述べた通り、「土曜日」は毎号六ページで刊行されたが、一度だけ一二ページに増頁された号がある。一九三七年六月五日付の

三四号がそれであり、アメリカのコロムビア・スタジオが製作した映画「失われた地平線」の特集を組んだ時であった。この特集号は、映画評論家・淀川長治（一九〇九〜一九九八）の寄稿が掲載されていることでも知られている。イギリスの小説家ジェームズ・ヒルトン（James Hilton 一九〇〇〜一九五四）が一九三三年に発表した同名の原作のあらすじは、以下のようなものであった。

一九三二年、中国のある都市の伝導病院で、行き倒れになった欧米人男性が収容される。彼は、昨年インドで起きた騒乱で行方不明になっていた英国外交官コンウェイであった。コンウェイの友人が病院を訪れ、彼を保護する。友人は彼を連れて上海へ行き、そこからサンフランシスコ行きの日本の定期客船に乗る。船の中で、コンウェイは彼の体験を友人に語る。

コンウェイはインド北部の街・バスクールの領事であったが、そのバスクールで革命騒動が起こる。彼は飛行機を手配して、居留民をペシャワールへ脱出させた。しかし、コンウェイ、部下の副領事、民間人二名の計四名を乗せた飛行機が、見知らぬ操縦士に乗っ取られた。

飛行機はカラコラム山脈のK2（世界第二の高峰）をかすめ、チベットの高原に不時着する。不時着の衝撃で操縦士は死亡するが、間もなく現地人の一隊が迎えに来る。コンウェイらは、シャングリ・ラ（Shangri-La）という美しいラマ教寺院に案内さ

れ、丁重で洗練された歓待を受ける。寺院に住む美しい娘は、見事なハーブシコードの演奏を聞かせた。

やがてコンウェイは、支配者である大ラマに謁見し、シャングリ・ラの秘密を聞かされる。

シャングリ・ラの時間は、外界よりもゆっくりと進み、住人もゆっくりと歳を重ねる。ハーブシコードを弾いた娘も実は一〇〇歳近い。大ラマ本人は今年で二五〇歳になる。彼らが一歩外界に踏み出すと、たちまち年相応に老いさらばえる。しかしシャングリ・ラに留まっても、やがては死を迎える。大ラマも死を間近に予感している。

大ラマはヨーロッパで生まれ、カプチン会士として二〇〇年前にこの谷を訪れた。最初は熱心に布教活動をしたが、次第に方針を変えて、ラマ教の教義を受け入れる形で伝道を続けた。やがて近くに大きな金鉱を見つけ、その金を外界と交換しながら、シャングリ・ラを整備していった。

外の世界は、いずれ再び大戦争が起きて滅びるだろう。その時、孤絶したシャングリ・ラのみは存続することができる。その時に備え、時々外界から数名ずつ人を招き寄せ、シャングリ・ラを支える僧を育てている。世界から最高の文物、芸術の精華を集め、新たな文明を築き、新たなルネサンスを興そうとしている。そして中庸の道を悟るコンウェイこそ、大ラマの後継者として選ばれた人なのであった。

最後の謁見で、大ラマはシャングリ・ラの全てをコンウェイに託し、死を迎える。コンウェイは迷った末に、副領事と、ハーブシコードを弾いた娘とともにシャングリ・ラを去る。そして数ヶ月後、コンウェイは中国の伝導病院に収容されたのだった。収容された時、副領事の姿はなかった。ハーブシコードの娘は老いさらばえており、間もなく死んだ。

以上が、コンウェイが船内で友人に語った物語であった。コンウェイは船を降りると、友人の前から行方をくらまし、再びシャングリ・ラの方角へと去っていった。⁸

あらすじのみ記せば二流ファンタジーであるが、この小説の秀逸さはコンウェイの人物描写にあるだろう。バスクールの脱出劇での英雄的な働きささも、コンウェイにとっては外交官として機械的にこなした業務に過ぎなかった。職務に全霊を注ぐ訳でもなく、さりとて反抗的な怠業に訴える訳でもない。普段は儉約的だが、時宜に応じて散財もする。未来に対しては、不安も希望もほどほどに抱いている。

よく言えば中庸、悪く言えば中途半端なコンウェイの人生観は、黄昏の予感が漂うヨーロッパの若い（主として男の）教養人達に、少なからぬ共感を呼んだ。概して彼らは西洋文明の輝きに飽食しており、それを補うように非西洋世界への憧れを抱いていた。

「失われた地平線」が抱く憧憬は、ルヴェー・ネーグルでジェゼフィン・ベーカーが演じて見せた南洋の楽園の夢と通底している。非西洋に憧れながらも、決して西洋の優越を手放さない姿勢は、詰まるところ植民地主義の精神的支柱であった。

ただし、「失われた地平線」はいくらか自省的であった。コンウェイの友人達が抱く金鉱征服の計画や、キリスト教普及の計画は失敗に終るのであることが暗示されている。ハーブシコードを奏でる娘も我が物にすることはできない。何よりも、シャングリ・ラの後継者に指名されたコンウェイ自身が、後継者たり得なかった。

今日から見れば、シャングリ・ラを通じて描かれたチベット文化はステレオタイプと言ってよいかもれない。しかしヨーロッパの中にも、より深くチベットを理解しようとする若者はいた。アレックスandro・ベンチヴェンニ(Alessandro Bencivenni 一九一五?～一九九五?)やフォスコ・マライーニ(Fosco Maraini 一九二二～二〇〇四)は、その筆頭にあげられるだろう。

アレックスandro・ベンチヴェンニ

アレックスandro・ベンチヴェンニは、カトリック系の聖ドミニコ修道会の僧侶であった。キリスト教神学、仏教学、現代哲学、スコラ哲学を修め、チベット語、中国語、日本語、ヘブライ語、サンス

クリット語、ヨーロッパ諸言語に通じたポリグロット(多言語話者)でもあった。しかし、これほどの知性を持っていたにもかかわらず、彼が残した著作は少ない。

ベンチヴェンニの経歴にも不明な部分があり、生年・出生地とも確認できないが、恐らく一九一五年頃、イタリア人の父とスペイン人の母との間に生まれ、フィレンツェで育った。イタリア学会誌に寄稿した論文の中で、幼少期の彼のやや暗い体験が語られている。

私が未だ幼い、四、五才のころのこと、家の庭に大きな白い七面鳥を飼っていた。その大きなことは、私がほとんど恐れを抱く程であった。誰もがこのすばらしい動物を非常にかわいがっていた。とくに私の父はそうであった。

クリスマスの際にこのかわいそうな七面鳥は、世界中の他のすべての七面鳥と同じく、殺されることになった。しかし誰も彼を殺す勇氣はない。ついに私の父は、家に肉を運んでくる肉屋を呼ぶことに決めた。彼は豚や牛を殺すことに慣れていたので、たいして躊躇もせずに、その七面鳥を殺した。私には、父が肉屋に怒ってこう叫んでいるのがまだ聞こえるような気がする。七面鳥は死んじやいない、痙攣を起こしているようじやないか、と。しかし肉屋はその時答えた。「それは *spiritu vitali* (註・神経と筋肉の作用の一種) ですぜ。あなたは何にも知らないんだ」。私の父は、この言葉がわからないながらも、非常に恥いていた。⁹

彼は雷をひどく恐れた。雷の鳴る日は怖気づいて家に閉じこもっていた。後年、日本の大学で講師をしている時、雷が鳴ると彼の授業は休講になり、学生達を喜ばせた——いや、女子学生は喜ばなかった。なぜならば美貌のイタリア人講師に会えないからである。ベンチヴェンニの端麗な容姿は際立っていた。男さえもその美しさに見とれるほどであった。

ベンチヴェンニはフィレンツェの高校を卒業した後、ローマの神学校に学ぶ。神学校からは北米に派遣され、滞在中に中国語、チベット語、日本語を習得した。彼が僧籍を得た聖ドミニコ修道会は、一九二八年に日本に進出し、一九三八年には東仙台に修道院を設立している。同じ年にベンチヴェンニも来日し、東北帝国大学法文学部印度哲学科に入学、仏教の研究を始める。「東北帝国大学一覽」

の三九年版および四〇年版には、「セ●●●●スラス・ベンチヴェンニ」という名前で在籍が記録されている。本名アレックスサンドロと異なるのは、何らかの原因による記載ミスと思われる。1011

ベンチヴェンニは東北大学入学に先立ち、ビザ取得のためイタリアへ帰国したはずである。彼が再びイタリアから日本へ向かうとき、どのような経路を辿ったのだろうか。三年後のフランソア喫茶室の改装で、客船風インテリアを提案したことから考えると、ロイド・トリエステイノ社か日本郵船の極東航路定期船に乗ったのかもしれない。

一九四一年三月、東北帝国大学を卒業したベンチヴェンニは、京都帝国大学文学部印度哲学科の大学院に進学する。¹² ¹³「京都帝国大学一覽」の四一年版および四二年版には、「セ●●●●スラス・ベンチヴェンニ」と記載されている。なぜかくも繰り返し記載ミスが起こるのだろうか。

この頃、ベンチヴェンニの内面に重大な変化が起きていた。仏教研究に没頭した彼は、カトリックへの信仰を捨て、真言宗への帰依を真剣に考えていたのである。彼はそれまで着ていた修道服を脱ぎ、質素な背広を着ていた。ただ彼の生活は、依然、神学校以来の禁欲主義に徹していた。

ベンチヴェンニの思想的立場の概略は、イタリア学会誌（への寄稿からうかがえる。

とも角、私達ヨーロッパ人にとって、ダンテは私達の過去を代表しています。ダンテは偉大な勇敢さをもった入ですが、この大胆さこそ私達のあり方でもあります。勇敢にして又革命的な思想は、キリスト教にあつて聖フランチェスコの完徳となり、宗教改革に於いてルッターを、絵画に於いてジョットやピカソを生むこととなり（ここで偶然幾人かの名前を列挙したに過ぎませんが）、つねにヨーロッパを励ましてきたのです。いわばかのオリンピアの松明の精神が、前進し、導き、輝やきながら、

私達をつねに激励しているのです。それにしてもこぞって私達はかの松明の担い手になりたいと願いましたし、それでなくとも、松明をかかげている人間に対してあるひそかな羨望を感じてきたのです。

あなた方は、そのことを、後にサルトルがわれわれは自由であるべく科せられていると云う実存主義的な概念と云いかえてみて下さい。そこで参加 engagement という概念とともに人間は、自由意志の、即ちオリソピアの松明をかかげて自ら創造しつつ突進して行くのです。それにしても結局、人間は自由の重さを感じずる時、そこから逃れようと願い、又それを宣告の負担として感ずるのは当然のことです。¹⁴

永らくカトリックの敵であったルター (Martin Luther 一四八三〜一五四六) を肯定的に引用していることから分かるように、ベンチヴェンニはプロテスタントとの接触を躊躇しなかった。実際、彼は京大の大学院生時代に、プロテスタント系の神戸女学院でイタリア語講師をしている。また、ピカソ (Pablo Picasso 一八八一〜一九七三) やサルトル (Jean-Paul Charles Aymard Sartre 一九〇五〜一九八〇) への言及が示すように、カトリック僧としてはかなりの左派であった。彼はまた、ジョット (Giotto di Bondone 一二六七〜一三三七) やダンテ (Dante Alighieri 一二六五〜一三二一) が担ったルネサンス文化を崇敬し、その発祥の地であるフィレンツェを深く愛していた。

フオスコ・マライーニ

一九四一年のある秋の日、三人の友人がベンチヴェンニの家を訪れ、彼を大原・三千院へのドライブに誘った。

一人は日本人男性、一人はイタリア人神父、そしてもう一人は、京都帝大文学部イタリア語講師・フオスコ・マライーニであった。同じ京大文学部に在籍しながら、それまで彼はベンチヴェンニとあまり言葉を交わしたことがなかった。

マライーニは一九一二年にフィレンツェで生まれている。父アントニオ・マライーニ (一八八六〜一九六二 Antonio Maraini) は彫刻家、母ヨイ・クロツセ (?〜一九四四 Yoï Pawłowska Crosse) はイギリス生まれの作家であった。彼は両親に連れられて頻繁に世界を旅した。彼の東洋への興味はこの頃に生まれ、漢字などの表意文字にも関心を持つようになる。母ヨイの蔵書の中には、河口慧海 (一八六六〜一九四五) のチベット探検記「西藏旅行記」(一九〇四年) の英訳版 *Three Years in Tibet* もあり、マライーニのその後の人生に大きな影響を与えた。¹⁵ フィレンツェの学校では、ベンチヴェンニが下級生として在籍していたが、この時も両人が知り合うことはなかった。家庭では普段から大変美味なトスカーナ料理に慣れ親しんでいた。が、両親が出かけた時は、イギリス人でプロテスタントのおばが代わりに食事を作った。筆舌に尽しがたい不味さであった。

一九三四年、フィレンツェ大学を卒業したマライーニは、リヴォルノの海軍兵学校 (Accademia Navale) に英語講師として就職し、訓練生と共に帆船アメリカ・ヴェスプッチ号に乗り込む。一九三一年に進水したこの帆船の名は、アメリカ大陸の名の由来となったフィレンツェの探検家・商人・地図製作家 Amerigo Vespucci (一四五四～一五二二) に因んでいる。約一〇〇名の士官、約二〇〇名の訓練水兵を乗せたアメリカ・ヴェスプッチ号は高さ五〇メートルの三本マストに帆を広げ、地中海を巡り、エジプト、シリア、トルコを訪れた。この航海を経て、マライーニの東洋への憧憬はさらにかき立てられた。

フォスコ・マライーニは、政治的には自由主義者であった。一方、父のアントニオはファシスト党を支持していた。一九三五年、フォスコがシチリア貴族出身のトパツィーア・アリアータ (Topazia Allata di Salaparuta) と結婚した時、アントニオは婚礼式場で息子に正式なファシスト党員証を贈った。フォスコは手にした党員証を粉々に破り捨てた。以後、二人が口をきくことはなかった。¹⁶ 三六年一月、長女ダーチャ (Dacia Maraini 一九三六～) が生まれている。

一九三七年、マライーニは、東洋学者ジュセツペ・トゥッチ (Giuseppe Tucci 一八九四～一九八四) 率いるチベット探検隊に、カメラマンとして同行する。トゥッチもまたファシスト支持者であった。しかしチベットへの絶ちがたい憧れと、東洋学者トゥッチへの敬意が、マライーニの反ファシズム感情を押さえ込んだようである。シャングリ・ラを思わせる壮麗と神秘に包まれた僧院、その背後に

そびえるカラコラムの山々は、マライーニを深く魅了し、以後、繰り返しこの地を訪れることになる。

一九三八年一月、マライーニは日本の外務省管轄の国際学友会から奨学金を得て来日し、北海道帝国大学医学部解剖学教室の無給助手として、アイヌの研究を始める。¹⁷ 来日にあたり、彼はトパツィーアとダーチャの家族三人で、イタリア・ブリンディーシ港から上海までコンテ・ヴェルデ号に乗船している。¹⁸ 上海から神戸まではイギリス P & O 社客船コルフ号 (Corfu、一九三二年進水、一四、二九三総トン) を利用した。コンテ・ヴェルデ号に比べ、コルフ号の食事は不味く、しかも食事時間の厳守を強いられた。¹⁹

マライーニの来日は、文部省管轄の国際文化振興会、外務省文化事業部、同省管轄の国際学友会、およびローマのイタリア中亜極東協会が主催する教授・学生の交換派遣事業の一環であった。この事業の幹旋で、ジュセツペ・トゥッチも一九三六年一月から翌三七年二月まで滞日している。交換学生については、マライーニのほか、ジュリアーナ・ストラミジヨリー (Giuliana Stramigioli)、ミケランジェロ・ピアチェンティーニ (Michelangelo Piacentini)、ブルーノ・ジオルダーニ (Bruno Giordani) が来日した。²⁰

このうち、ジュリアーナ・ストラミジヨリーは京都帝大に留学し、仏教美術を研究している。一時帰国の後、三九年からは在日イタリア大使館の情報部に着任した。ストラミジヨリーもまたファシズム支持者であり、彼女の著書「日本 (Il Giappone)」の記述の半分は枢軸同盟国日本の紹介となっている。²¹

後年、彼女は黒澤明（一九一〇～一九九八）の映画「羅生門」のフィルムを持ち出し、一九五一年のヴェネツィア国際映画祭に出品して金獅子賞を受賞させている。²² ストラミジョーリの日本への献身は、ある意味において手段を選ばなかった。こうした日本への強烈な情熱と信頼は、政治的立場は異なるにせよ、ベンチヴェンニやマライーニらにも共通していた。

「日本」の後半には、仙台の伊達藩と、北海道のアイヌに関するやや詳しい叙述がある。²³ これら文章は、当時東北大にいたベンチヴェンニと、北大にいたマライーニの助言があったとみて間違いないだろう。

チベット民族と並び、北海道の奥地に住むアイヌは、当時の世界の民族学者の関心の的であった。

奨学金を出した「国際学友会」は、マライーニがアイヌの研究をしたいというのを聞き、もっと日本的なもの、たとえば能や歌舞伎などを研究してはどうかと提案した。だがマライーニはどうしても北海道に行きたいと言い張り、学友会の人々もしぶしぶ同意した。²⁴

マライーニが見たアイヌは、もはや秘境の楽園に遊ぶ民ではなく、収奪と差別にさらされ、しかしなおも彼らの生き方を貫こうと抵抗する人々であった。今や地球上に秘境はなかった。チベットが植民地主義の侵食を免れていたのは、チベットを利用して中華民国を牽

制しようとするイギリスの思惑があったからに過ぎない。そのような思惑のない限り、世界の少数民族は例外なくジェノサイドに見舞われていた。北大に在籍した三年間、マライーニは北大生・宮沢弘幸（一九一九～一九四七）と共に、アイヌの生活改善のために奔走した。

一九四〇年五月、ドイツはオランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、フランスへの侵攻を開始し、翌六月イタリアが参戦する。欧州へ極東航路定期客船の運行は休止し、コンテ・ヴェルデ号も上海で身動きが取れなくなった。帰国の術を失い、国際学友会からの奨学金支給終了を目前に控えたマライーニは、日本国内に新たな生活手段を得る必要に迫られた。ちょうどこの時、京大文学部教授・黒田正利（一八九〇～一九七三）が、日伊同盟強化を追い風にイタリア語学科の新設を働きかけ、実現の運びとなった。一九四一年四月、マライーニは京大文学部に採用され、黒田と共にイタリア語学科の初代講師として就任する。

彼は京大近傍の田中飛鳥井町の家に住んだ。四年前まで「土曜日」を刷った印刷所や、斎藤雷太郎が住んでいた下宿の近くである。マライーニの家は、元々メソジスト系教会の牧師の住居であり、礼拝堂も併設されていた。家主がマライーニに代わってからも、礼拝堂には毎週日曜になると信者が集まった。当時、田中飛鳥井町は絹織物工場に囲まれており、そこで働く労働者のほとんどが朝鮮人であった。彼らの中にも、マライーニの家の礼拝堂に通う者がいた。²⁵

ベンチヴェンニの仏教への傾倒

マライーニの講師就任とほぼ同時に、ベンチヴェンニが同じ文学部の印度哲学科大学院に入学する。彼がフランスア喫茶室の改装に関与したのはこの頃である。しかしそれがどのような形で行われたのか、彼は終生口を閉ざした。この頃のベンチヴェンニはひどく寡黙であった。彼に話しかけることが容易でなく、当初はマライーニも彼と親しくなることができなかった。二人の親交は、ある秋の、紅葉の美しい日にはじまった。²⁶

その日、マライーニは、友人の日本人男性、イタリア人神父、そしてベンチヴェンニを誘って、大原の三千院へドライブに出かけた。——この頃、マライーニは自動車を所有しており、よくダーチャを連れてドライブをしていた。²⁷ 修学院を過ぎて高野川に沿う道に入ると、見事な紅葉を迎えられた。大原の三千院は燃えんばかりのモミジに覆われていた。車を降りた四人は、門の前の茶屋で一服することにした。店の若い女性が、四人にお茶を注いで回った。マライーニが、仏教学徒のベンチヴェンニに、三千院の由来を尋ねた。

「なぜ三千なんだい？」

「今日はよくしゃべるね。多分お坊さんが数を数えて、三千で飽

きてしまったんだろう。僕にしゃべりかけてないで、あの素敵な店員さんと話したらどうだい。」

取り付く島もないベンチヴェンニに、神父が真面目に答えるように促した。仕方なくベンチヴェンニは、三千という数字が天台宗の世界観を象徴していること、宇宙のすべてが三千個の基本要素で構成されているという思想に基づいていることなどを説明した。

「元素周期表の形而上学版だね。ものすごい元素数だけど。」

と、同行の日本人が会話を繋いだ。

「しかし、アレックスandro、天台宗の考え方では混乱が起きないかな。主体と客体、精神と事象の区別が全然ないのでは……」

この神父の批判で、ようやくベンチヴェンニは本気で話し始めた。

「仏教の形而上学の深淵がそこにあるのです。すべては精神の中にあるのですよ。インドの龍樹、無著、世親をご存知でしょう。ヘーゲルより一二〇〇年も前です。ヘーゲルと理想主義者達は、インド哲学をろくに理解もしないで、世界のすべてを知ったような顔をしている。もし彼らが自分達の無知を知っていたら、もう少しは謙虚になっていたはずですよ。そう思いませんか。」

龍樹 (Nagarjuna) は紀元前二世紀〜三世紀頃のインドの僧、無著 (asaṅga) は三一〇頃〜三九〇頃の大乗仏教の大学者、世親 (vasubandhu) は無著の弟であり、いずれも仏教哲学の体系化に取り組んだ人々である。彼は天台宗哲学の説明をさらに続けた。普段は議論を好まない彼であったが、一度話を始めると、もう誰にも止められなかった。

そのように話す時のベンチヴェンニは目が輝いていた。その美しさはディオニュソスにたとえられるだろうか。あるいは文殊——華麗なる知性——にたとえるべきか。

マライーニら三人の男達はベンチヴェンニに魅了されていた。それに気付いた彼は、話すのをやめ、顔を伏せながら笑った。

この日以来、ベンチヴェンニとマライーニは親交を深めていった。ただ、なぜか彼は、今まで以上に顔を曇らせることが多くなった。フランソアのことでは何か問題があったのだろうか。あるいは恋人でもできたのだろうか。

一人だけ、彼の人生でただ一人だけ、交際した女性がいた。²⁸ある日、マライーニがベンチヴェンニの書齋を訪れると、香水の匂いがした。明らかに女性のものだった。

また別の日には、彼の蔵書に紛れて、レースの手袋があった。

洗練された女性しか使わないものだった。またある夜、彼の家から女性の影が去っていくのを見た。あの香水の匂いが微かに残っていた。

数ヶ月後、彼はインド美術に関する本のページの間に一枚の写真を落とした。女性の写真であった。彼は追い詰められたように顔を伏せていた。

そのさらに数ヶ月後、ベンチヴェンニはマライーニとトパツィーアを東山山麓の日本料理店に招き、その女性を紹介した。三〇代に見えるその小柄で優美な女性は、インド文化に強い憧れを抱いていた。この食事を除けば、ベンチヴェンニが彼女と一緒にいるところを見たものはいなかった。ただ、彼の書齋に漂う香水の香り、彼の思い悩む顔、萎れた花、長期の不在などが、交際の痕跡を示すだけだった。この蜃気楼のようなロマンスにも終わりが訪れた。

そして——皆も少しほっとしたのだが——ベンチヴェンニの生活から女性の影が消え、再び彼は学究と禁欲に没入した。朝早く起き、夜遅くまで仕事をし、米飯とハーブと少量の果物を食べ、飲酒は一切せず、ただ牛乳を飲んで過ごした。もはや彼の書齋に香水の匂いはなかった。

ベンチヴェンニはあらゆる宗派の仏教哲学の研究を続けた。その中で特に彼が究めたのは真言宗であった。

真言宗とベンチヴェンニは、まるで同志だ。真言宗の教義が、世界の始まりからベンチヴェンニを待ち続けていたかのように見える。地球の裏側から彼がやって来たのは必然の運命としか思えない。ベンチヴェンニは明快を嫌い、難解、複雑、婉曲、不明瞭を好んだ。真言宗は、知に至る一〇の段階を持っている。九段階は書物で伝える顕教、最後の一段階は師から弟子で口伝する密教である。こうして知の頂点に立った者は、秘密莊嚴心ひみつしょうこんしんと呼ばれる。まさにベンチヴェンニのような人にか辿り着けない境地である。²⁹

ある梅雨の日、ベンチヴェンニは真言宗の本山・東寺で灌頂かんじょうを受ける。こうして彼は真言宗の僧籍を得た。

獄中

立野正一が山科刑務所を出所したのは、一九三九年一月頃である。約一年半の刑務所暮らしで、立野はやせ衰え、栄養失調となっていた。それは河上肇をはじめ、治安維持法違反で検挙された者すべて

に共通したことだった。

当然のことながら獄中で左翼関係の本を読むことは禁じられた。その一方、国体支持的と判断された書籍の差し入れは許された。佐藤留志子が正一に届けた徳富蘇峰（本名・猪一郎、一八六三〜一九五七）の「近世日本国民史」も許可書籍の一つである。当初平和主義を唱えた徳富は、日清戦争を機に国家膨脹主義に転向、一九五七年に死去するまで右派論客として筆を振るった。織田信長から江戸幕府終焉までを記した全五〇巻の「近世日本国民史」は、その史料の信頼性・網羅性から、政治的立場を問わず評価が高い。ことに第四三巻「桜田事変」が描く水戸藩士の姿は、立野の心に響いた。

外圧を憂慮し、止むなく日米修好通商条約に調印した井伊直弼は、安政の大獄で尊皇攘夷派を徹底的に弾圧し、幕閣達の異論をも封じる。安政大獄前、孝明天皇（一八四六〜一八六七）は水戸藩に対し、井伊の開国方針に抗して攘夷を命じる勅諭を下賜した（戊午の密勅）。勅諭の影響力を恐れた井伊は、水戸藩に勅諭返納を命ずる。当初は攘夷論を率いていた水戸藩内も、返納派（鎮派）と拒否派（激派）に分裂する。

勅諭返納を説く鎮派の若年寄に、激派の森五六郎（一八三六〜一八六一）が刀に手をかけ詰め寄る場面がある³⁰。かつて新労農党解消派と激論を交わした立野にも、似た記憶はなかっただろうか。

桜田門で井伊暗殺を遂げた後、薩摩藩有志の支援が得られないことを悟った金子孫二郎（一八〇四〜一八六一）と佐藤鐵三郎（？〜一九一五）は、伏見奉行所へ自首する。奉行所への護送の様子を、

佐藤は記す。

——七八人前後を囲み、縄をかけ駕籠に乘せて奉行所に連れて行き、八畳敷ばかりの一室に入られ是にて同心更に縄を打ち替え、左の手に錠を卸し、足にほたを打ちたり。同夜吟味所に呼び出され、板椽いたえんの上に坐す。 31

恫喝と甘言で都合な供述を引き出そうとするのは、特高も幕府も同じであった。暗殺実行犯を審問する池田頼方（？く？）は、水戸藩士の勇気を称えつつ、攘夷論指導者・水戸齊昭（一八〇〇〜一八六〇）の関与を引き出そうとする。

——侍と申せば、我等も同様之儀、其主君其主君の命を奉じ、死してこそ名義も立つもの也。其方杯そのほうなびは御三藩の家来と申せば、尚更立派に死してこそ本意なれ。さすれば御直おんじきには伺わず共、前殿（齊昭）の思召おぼしめしとか何か聞伝え、此度このたびの旨義しぎに及びしに之有るべし。左様なれば名義も相立あいたち、実に其方共そのほうどもは、君命を奉じ

て死しすなれば、感心の至り也と云い。 32

陰いん（一八〇九〜一八六七）による批判を引用する。
徳富は「桜田事変」の巻末近くにおいて、儒者で山形藩主の塩谷宕

掃部頭様（註・井伊直弼）御事禁廷を御軽蔑成され、天子之御舍弟様（青蓮院宮）御始、近衛様等大臣方、公方様より重き方々を塵芥を吹くが如く、御取除成され、右に付いては、一昨年（安政五年）已来刑戮に相成候五六十人之内、天下有名之学者も之在り、一藩にて忠臣と呼ばれ候者も之在り、多くは濫刑を蒙り申候。之によりて天下有名之者に於ては、挙つて齒を嚙かみ憤怒罷在候。

水戸侍も、此處第一に憤り、此度之事に及候事情と相見

吉田松陰（一八三〇～一八五九）、橋本左内（一八三四～一八五九）等々、思想的立場は異なるにせよ、幕末の反乱者達と彼らが受けた弾圧は、治安維持法の暴圧に倒れた昭和の政治囚達と、あまりに多くの点で類似した。

後に残した親しい者達への想いも、彼らを等しく苦しませた。金子孫二郎が家族に別れを告げる様子は、次のように記されている。

——家を出るに当り老母に暇乞を告げしが、氣丈にも止むる言葉はなく、却って喜ぶの色あり。妻は知らるる通り、無頓着の質ゆえ、驚く体も見えねば、後に思い残すこと聊かもなし。

只十一歳なる二男の、御父様は何處に行き玉うぞと袖に縋られたる時は、無言にて振り放したり。愛情転じて怒気を生ぜしが、西行の遁世する時、我兒の慕うを蹴倒し、振り返りもせず立去りしとは、あまりの無情かなと常に言いたるにも似ず、我身の上となりては、思い当たりにて、一層憐れなりと。³⁴

氣丈な母親は一九三七年の京都にもいた。中井千代（一八七〇～一九六二）は、五条署に収監された息子・正一と面会した際、次のように話した。

「中におるもんじゃゆうて、悪いもんばっかりはおりゃへん。外におるもんじゃゆうて、ええもんばかりおりゃへん。正を踏んで恐るるなかれじゃ。しつかりやれ。：体だけは大事にせいよ。」

中井正一の拘留期間は一年九ヶ月に及んだ。

フランソアの経営を支えた佐藤留志子の決意も、中井千代に劣らず堅固であった。立野正一の服役中、山科刑務所への面会と差し入れは欠かさず、正一の父母を励ますことも忘れなかった。「土曜日」関係者と同じく、留志子も日中戦争敗退を見通しており、物資不足に備えてコーヒー豆を買い溜めた。立野の服役中に、留志子が店員の慰安するため、清水寺を訪れた時の写真が残されている。留志子、女性店員二名、バーテンダーの星野、正一の父、先斗町の芸妓の計六名が、清水寺の舞台に並んで写っている。写真部のモデルとして撮られ慣れていたためであろうが、留志子の表情は明るい。フランソアが危機にあったこの時期に、留志子はこの笑顔で客に接していたのだろう。立野正一が山科刑務所を出て帰った時、フランソアは、彼が逮捕される前よりも繁盛していた。

そして立野正一と佐藤留志子は結婚した。

古き都に咲きし 花の命は

祇王の夢ならずや 常磐ときわならずや

さらば吹けよ みね吹く風よ

吹きて悲しみの 歴史ぞかえん

友よ香りゆかしき 乙女ならずや

我もまた真まこともつ 乙女ならずや

さらば恋せよ 自由の園に

希望と喜びの 花ぞ開かん

我ら今誰がために 学ぶにあらす

この小さき手の中に 平和の花摘むを

さらば行かん 青い空のもとを

ひとすじにかけてゆく 誇りぞつよし

これは先に触れた木下恵介の映画『女の園』の主題歌である。作

詞・作曲は木下忠司（一九一六〜）が担当した。映画の中で、この歌の由来が次のように説明される。

一九二〇年台、京都の保守的な女子学校に学ぶ美しい女子学生が、

ある男子大学生と燃えるような恋に落ちる。自由恋愛を禁じる学校側は二人の関係を妨害する。これに反発した女子学生は卒業前に退学し、恋人の元へ走る。その時、彼女が作ったこの歌が、三〇年を経てなお在校生の間で歌い継がれている――。

一九二〇年台、あの頃は学生達が、三高で、絵専で、自由を求めて気焰を上げていた。労働者、未解放部落民、朝鮮人、中国人が結社し、搾取と差別の無い未来を語り合った。警察までもが労働組合に協力した。それから一〇余年、組合は敗退を重ね、いま京都には反動の嵐が吹き荒れている。しかし、間もなく反動は終わり、組合や党が息を吹き返すだろう――。

ファシスト政権発足時のイタリア共産党員や社会党員が未来を樂觀したように、留志子も立野正一も情勢の改善を望みをつないだ。そしてイタリアの左翼達と同じく、その望みは打ち砕かれてゆくのだった。

ただし、京都の府警や検察に人道主義的な人物が多かったという話は、しばしば耳にする。

一九三六年に逮捕された浅野竹二は、彼を取り調べた検事の思い出を次のように語る。

私を取り調べた検事は三木今二と言う人で鬼検事と言われる程の腕ききであった。何回か私を取り調べてから、三木さんは言った。「君は、コムニストではない。単なるヒューマニストや。」

と。

私は釈放されてから後も、屢々三木さんに会っていた。そうして、次第に親しさを深めて行ったのであった。三木さんが名古屋の検事局に転じてからも、三木さんは私の作品頒布会に加わってくれ、そんな具合で次第に交友は深まって行き、遂に三木さんをして、私のことを「心の友」と言わしめるに至った。

三木さんはその後ずっと私の頒布会の発起人となって会員を作ったり、又その他色々な仕事を世話して呉れた。

三木さんは、私の生涯のうちで、「最も」と言ってもよい位、私にとつてのよき友人であり、又恩人でもあった。

去年（一九九〇年）一〇月、私が腰痛で臥している時に、三木さんの突然の言訃報に接し、私は、思わず声をあげて泣いてしまったのであった。³⁵

中井正一は、拘置中の取調べの様子を次のように語る。それは雪の降る日であった。

昼頃になつて、調室に出された私は、係官のT刑事に、「この雪は二万尺の上から、一つ一つ結晶して落ちて来ているんです。この一片の雪よりも、私達の世界の方がみじめです」と云った。

刑事は、いつも、きつい目をしてにらみ据える人間だったが、その時だけは、だまって、窓に向つて歩いて行って、じつと空

をしばらく見上げていた。³⁶

出所後の中井正一を監視した特高達の様子については、長女の岡田由紀子が語っている。

治安維持法にしばらくられている父のところに月に何度か特高が訪れていた。祖母のその対応は他の来客と変わらなかった。門近くに立つその人に茶を勧めた。

祖母の口癖に「日に新たなり。日に日に新たなり」という言葉がある。例えばその日会った瞬間は、初めて会った思うという。勿論、その人格、立場などはすべて整理して認識はしている。その瞬間は先入観を捨てて「おはようさん」と隣人と同じ気持ちで迎えるというのだ。最初はとまどったのではないだろうか。でも一人の人間として話し合う部分で任務とはなれた話題の中で、祖母への信頼が生まれたのではないかという記憶がある。私が京都府立第一高女に入学して、新制服という全国統一のスフ（人絹）の制服を着ているのを見て、娘さん（四年生在校）の小さくなった古い制服を下さったのだ。

憧れの制服を着た喜びは忘れられない。

あとから人づてに、父母が京都を去った後、特高をやめて他の仕事にうつられたと聞いた。

（岡田由紀子談）

フランソア喫茶室の改装

立野の出所後、党や組合の再建の見通しは無く、情勢好転の兆しなど微塵もなかった。一九四〇年からは、労働組合解消と産業報国会への転換が進む。同年四月には京都府産業報国会連合会が結成され、会員は労使含めて一〇万を超えたという。七月、報国会転換に抵抗を続けていた京都樽工組合が、警察の圧力に屈し、転換を受け入れる。³⁷さらに八月、朝田善之助が全国水平社の解消を訴え、部落厚生皇民運動への転換を呼びかけた。朝田が、あの百戦錬磨の朝田善之助が、遂に屈服したのだった。

そして九月、最後まで抵抗を続けていた京都陶磁器工組合も敗北する。一九二二年の結成から組合を指導してきた加藤護一は、指導部から排除された。解散式の際、組合員達は君が代斉唱を拒否して抵抗の意思を示した。³⁸こうして京都の労働組合は一つ残らず消え去った。

一九四一年、立野正一と立野留志子はフランソアの改装を決意する。正一が釈放され、彼と結婚した後も、留志子は営業の手を休めることなく、佐々木きみの「カレドニア」と競い合い、収益を上げ続けていた。三四年の創業以来、店の内装もやや見劣りしてきたため、十分な投資をして、本格的な意匠設計を施すことにした。この

改装は、現状の店舗の北側の町家を一軒買い取り、この町家を新店舗として改装し、現店舗を閉鎖するという手順で進められた。ところが、この改装時の記録が、設計図を含めてほとんど残っていないのである。唯一の手がかりは、立野正一が周囲に語った、以下の断片的な話のみである。

- ・ イタリア人留学生「ベンチヴェンニ」が設計した。その意匠は、豪華客船のホールをイメージしており、イタリアン・バロックを基調とした装飾を施している。
- ・ ステンドグラスのデザイン、壁面の小さな油彩などは画家・高木四郎（一九〇九〜）が制作した。
- ・ 施工は「芝亀」という工務店が請け負った。造作は、日本銀行京都支店の施工に携わったこともある大工が担当した。
- ・ ステンドグラスの制作は、当時、四条木屋町付近にあった「中山ガラス店」に依頼した。

ベンチヴェンニは、京大で建築を学んでいた留学生という伝聞もある。同名の別人である可能性はあるだろうか？ 京大工学部建築学科の同窓会誌である「京大建築会会報」を見る限り、ベンチヴェンニの名前は見出せない。³⁹ ⁴⁰ ⁴¹ 当時日本に住んでいたイタリア人は七〇名程度⁴²とされ、京都に限れば一〇名にも満たなかったであろう。ベンチヴェンニという姓も、イタリアでは比較的珍しい姓である。このような事情から、別人の可能性はまずないであろう。

前に述べたように、ベンチヴェンニはこの頃の出来事について一切語っていない。今日私達が、立野とベンチヴェンニとの間に見出せる接点は、「土曜日」や京大文学部を通じた人脈、進歩的知識人に共通するルネサンス評価、あるいは反ファシズムといった、ごく皮相的な共通項のみである。ベンチヴェンニは建築の専門家ではないが、東西の宗教美術や建築様式に通暁していた。実施工図とまではいかなくとも、すぐに図面に引き起こせる程度の詳細なスケッチを描いた可能性はある。

立野とベンチヴェンニがどのように知り合ったのかも不明だが、恐らく京大文学部講師・須田国太郎の仲介があったと思われる。旧消費者組合や「美・批評」に関与してきた須田は、立野正一や中井正一と、一〇年来の付き合いになっていた。立野留志子の兄・佐藤晴行も、須田から絵画について助言を受けていた。

須田はまた、ステンドグラスをデザインした高木四郎の師でもある。一九〇九年に京都で生まれた高木は、京都府立第三中学校を卒業した後、油彩画家を志して津田青楓に師事した。前述のとおり、津田は一九三三年の大森ギヤング事件に関与して検束され、釈放後に日本画へ転向した。高木は油彩の師を失う形となり、あらためて須田に弟子入りしたのだった。

こうしてベンチヴェンニと高木の合作により、今日まで残るフランスアのインテリアが作られた。

木屋町通りに面した淡いグレーの外壁面には、二つの尖塔アーチ状のステンドグラス窓と、格子ガラス窓をはめた片開きの入口ドア

が並ぶ。入口右側の壁面は、大きく円形に面取られ、その上に半四角錐のランプが設けられている。二階に並ぶ三連窓と一枚窓の間に、盾の紋章が浮き彫りにされている。二階軒下には飾り帯が走り、屋根は旧店舗と同じくスパニッシュ瓦で葺かれている。

入口をくぐると、壁・天井とも漆喰で覆われた玄関がある。右側壁面にある小さな窓は勘定カウンターであり、その奥には大型蓄音機が、大量のレコードのコレクションとともに置かれた。玄関を通り抜けると客室に入る。右手の木製壁面は、天井の漆喰面とアーチ状の境界で分けられている。壁面中央には蟬台型のランプがあり、その前に並ぶテーブルと椅子をほのかに照らしている。これらの調度は家具店が製作したが、椅子の背もたれの彫刻は、立野の美工後輩の山崎脩（おさむ）（本名・修、一九二九〜）が手がけた。座面と背もたれに張られた真紅のビロードは、赤石円三郎とともに労働運動を闘った朝鮮人職工が織ったのかもしれない。山崎はこの頃を次のように回想している。

——戦火に見舞われない京では住の悲惨さは知らないが、衣食の極限は身に浸みている。衣は繕えるだけ繕い、食は飢えを確実に体感して生きた。

しかし価値観の多彩と強いられない自由の感動もこの時代に味わい、それ迄の干涸びた心の隙間が温い血潮で満たされていた。ふり返って戦中派の中途半端さも換言すれば戦前戦後の

両時代への幅広い理解の上にこそ成立したと云えば自らへの慰めにもなる。⁴³

客室の中央へ進むと、照明が明るくなり、大きなドーム天井が現れる。このドームの下には正方形平面の中央客室スペースがある。薄暗く狭い玄関から中央ドームへ至るアプローチには、暗から明へ、狭さから広さへ、不整形から整形への移行を巧みに演出している。

客室左右の壁は、螺旋柱が支える三連の楕円アーチが造形されている。螺旋柱や楕円アーチなど個々のディテールはバロック的であるが、正方形平面に規則正しく柱が配され、その上に半球ドームを戴く客室は、むしろルネサンス様式の印象を与える。実際、壁面のアーチの下の貝殻型のガラス製照明は、ボッティチェッリの「ヴィーナス誕生」に描かれた貝をイメージしたものである。ドーム頂部から吊るされた照明も、四枚の貝殻状ガラスを円形に並べており、中央客室全体を強く照らし出している。右側（北側）壁面中央には、メデイチ家が直接頒布したモナ・リザの複製が掲げられており、ルネサンス礼賛の色彩が濃い。コンテ・ヴェルデ号がルネサンス意匠の集積でバロック趣味を漂わせたのに対し、フランソアはバロック意匠の配列によってルネサンス的空間を生み出すことになった。

モナ・リザと向かい合う壁には伊谷賢蔵が描いたパリの絵が掲げられている。この二枚の絵のために、壁面には額縁の大きさに合わせた窪みが設けられた。

メニュー表紙は土田麦僊の弟子・浅野竹二が描いたバレリーナの

絵に改められた。藤田嗣治作の旧メニューは、彼が従軍画家として戦争画を描いていたことから敬遠されたのかもしれない。⁴⁴

ところで、フランソアが直接のモデルとした豪華客船は存在するのだろうか？ ここで思い起こされるのが「失われた地平線」である。シャングリ・ラを去ったコンウェイは、友人に保護された後、日本の定期客船に乗船した。コンウェイがシャングリ・ラの記憶を語ったのは、その船室である。シャングリ・ラの理想とは、つまるところルネサンスの再興であった。

ベンチヴェンニが「失われた地平線」に触発され、フランソアを日本の定期客船風にデザインし、ルネサンス再興の夢を語る場にした、という推測もできなくはない。それにしても該博なベンチヴェンニが、やや通俗的な印象の拭えない「失われた地平線」のストーリーに共感できたのだろうか？ 仮にそうであるとして、ではフランソアと同じインテリアを、当時の日本の客船に見出せるであろうか？

コンウェイが乗船したのは、上海を出航してサンフランシスコへ向かう日本の定期客船であり、一九三二年五月頃という設定になっている。この条件に該当するのは、日本郵船の浅間丸、秩父丸、竜田丸の三姉妹船である。この三隻は日本郵船のフラッグ・シップであり、とりわけ浅間丸は、当時の日本人にとって豪華客船の代名詞であった。しかし浅間丸の食堂、音楽室、喫煙室などの面積はフランソアを遥かに上回り、ドームや吹き抜けの高さも数倍はある。各公室のインテリアは、

一等ベランダ（端艇甲板）はスペイン一六世紀様式。
一等エントランス・ホール（A甲板）はウイリアム・メリー様式。
一等ラウンジ（A甲板）、一等ギャラリー（A甲板）は早期ジョージアン様式。

一等喫煙室（A甲板）はチュードル様式。
一等子供室（A甲板）はイギリス田舎屋の中庭風。
一等食堂（C甲板）はジョージアン様式。
一等プール（E甲板）はローマ様式。⁴⁵

と様々な様式が混用されていた。秩父丸や竜田丸の公室も同様である。やはりフランソアは、コンウェイが乗った船をモデルにしたわけではなさそうである。

ただし、浅間丸、秩父丸、竜田丸が就役した一九三〇年まで、サンフランシスコ航路を担当していた天洋丸（一三、四五四総トン、一九〇七年進水、翌〇八年竣工）のインテリアは、比較的フランソアに似た印象を与える。天洋丸は東洋汽船が三菱長崎造船所に発注した客船で、一九〇七年に進水、翌〇八年に竣工し、サンフランシスコ航路に就役した。一九二六年、東洋汽船の経営難により、日本郵船に移籍している。天洋丸の公室はオールヌーボーを基調に、日本の意匠を織り交ぜている。⁴⁶ ルネサンスやバロックの趣とはかなり異なるものの、天窓を取り巻く二段天井や柱列、木製パネルの壁、比較的小規模な公室面積など、フランソアを髣髴とさせる要素は多

い。

天洋丸が建造された三菱長崎造船所では、同じ一九〇八年に賀茂丸（八、五二四総トン）が竣工している。国画創作協会の土田麦僊、小野竹喬、野長瀬晩花、黒田重太郎が、一九二一年の洋行で乗船した欧州航路客船である。賀茂丸もまた和洋折衷の装飾を採用したが、公室の雰囲気はフランソアに似ていたと思われる。日本建築学会誌は、賀茂丸の一等食堂を次のように紹介している。⁴⁷

一等食堂は上甲板に在り四壁は張るにホワイトオークを以てし、広き迫持形の羽目を連ね其主要部に罌粟の実と葉との薄肉彫を施せり、天井は自塗に金箔を押し、床はチークとオークの寄木張なり、取付椅子回転椅子は緑色の革を以て張り窓には藍綠色の地に罌粟花の模様ある窓掛を懸く、前壁中央部にピアノ一台を据え後壁の左右両隅には食器飾棚を置く、室の中央部なる天井を貫きては高さ三十尺に達する大ドームを架し以て採光と換気とに備え群鳩松樹上に戯るるの模様ある嵌色玻璃を以て之を覆えり、左右出入口扉亦松鳩の模様ある嵌色玻璃を用い、他に二ヶ所の天窓あり亦嵌色玻璃を用いたり。

大ドームとは、フランソアのような半球ドームではなく、ステンドグラスの天窓で覆われた矩形の吹き抜けであろう。また高さ三十尺（九・一メートル）とあるが、ステンドグラス天窓の高さは床上六メートル程度と思われ、フランソアのドームの高さと同程度とな

る。

また、フランスアを施工した大工は、日銀京都支店（一九〇六年竣工、一九六九年重要文化財指定、現・京都文化博物館）の建築にも携わった。同支店は天洋丸や賀茂丸と同時代の建物である。明治末に一応の成熟に達した洋風建築施工術が、フランスアの精緻な意匠に生かされたのであった。天洋丸や賀茂丸など、大正年間を中心に活躍した一万総トン前後の客船の公室が、設計の参考となった可能性は高そうである。

しかし、船内全体がイタリアの様式で統一された豪華客船となると、やはりイタリアの船以外にない。コンテ・ヴェルデ号など、欧州極東航路定期船のインテリアが参照された可能性はあるだろうか？コンテ・ヴェルデ号の一等公室は、フランスアとは比較にならないほど豪華かつ広壮であった。ただし同船の二等ホールや二等喫煙室ならば、内装グレード・面積ともフランスアと同程度である。ベンチヴェンニ自身の乗船体験や、マライーニなどの友人の話を聞きながら、ロイド・トリエステイノ社の客船インテリアを模倣した可能性はある。

フランスアのインテリアが、イタリア・ルネサンスへの崇敬や、フィレンツェへの憧憬に満ちていることは、誰もが認めるところであろう。客室と厨房を仕切る壁を飾るマリアのステンドグラスには、宗教的情熱さえ感じられる。このステンドグラスの図面を直接引いたのは高木四郎だが、神学校を出たベンチヴェンニも、当然何らかの助言をしたと思われる。

ただ、一九四一年という時代を考えると、イタリアン・バロック様式という選択はかなり守旧的な印象を拭えない。昭和前期の日本において、本格的な意匠設計を施された建築（日本建築を除く）は、大勢において以下の三つに分類できた。

(一) 西洋古典主義様式の墨守。かつて日本の官公庁舎・大企業社屋の主流であったが、一九四一年当時では過去のものになっていった。フランスアがこれに該当する。

(二) 様式の氾濫または折衷。西洋史権威の相対化、非西洋への関心から、様式の純粹性を追求せず、複数様式の混在、または折衷を容認した。多くの日本客船のインテリアで見られた傾向である。

(三) 世界史の新たな理解に基づく新様式。モダニズムである。既往様式の装飾性を徹底排除し、新たな純粹様式として成立した。例えば前川國男（一九〇五〜一九八六）は、日本郵船檀原丸（一九四二年竣工直前に空母隼鷹に改造、二七、七〇〇総トン）の公室をモダニズム様式で設計している。

これらの趨勢を見れば分かるように、フランスアの設計姿勢は超保守的という他なかった。

ベンチヴェンニは、哲学、美術、音楽すべての整合と統一を求める人であり⁴、そのような立場からは、安易な様式的折衷は容認できなかつたであろう。一方で、一九四一年当時、モダニズムもも

や左派のシンボルではなかった。イタリアの代表的モダニズム建築家ジュゼッペ・テラーニ (Giuseppe Terragni 一九〇四〜一九四三) はファシスト政権に全面的に協力していた。日本政府の各省庁の営繕部局もモダニズム様式の採用を躊躇しなかった。

結局、ベンチヴェンニに残された道は、古典主義様式の墨守しかなかった。彼は近代西洋思想を批判的に見ていたが、ルネサンスの文芸は高く評価し、仏教哲学とも共存し得ると考えていたようである。

先に引用した『ある皇帝の変身譚』と『ニーラカント鳥変身譚』について」という論文では、十六世紀イタリアで刊行された物語と、古来チベットに伝わる物語との類似性を論考している。⁴ 両者はいずれも、人の魂 (anima ないし spiritus vitalis) が鳥に乗り移って騒動を繰り広げる物語である。ここで、anima や spiritus vitalis とは、魂というよりも、神経や筋肉を動かす独立したエネルギーのようなもので、正統キリスト教哲学には含まれない概念である。このためベンチヴェンニは、イタリア側の物語が、チベットないし仏教圏に起源を持つのではないかと推測している。それは逆に言えば、ルネサンス文芸が、キリスト教思想であれ仏教思想であれ柔軟に受容していたことを意味する。

ただしフランスの建築様式自体は、ほぼ忠実なイタリアン・バロックである。十六世紀には後期ルネサンス建築と初期バロック建築が並存したが、ベンチヴェンニの敬愛したダンテやジョットの時代よりはかなり後である。ルネサンスの精華を、対抗改革期のバ

ロック様式で表現することには一見矛盾がある。

バロック様式の採用理由として考えられそうなのは、店内に流れる音楽との整合である。フランスで好まれたベートーヴェンは時代が新しいが、より古いモンテヴェルディ (Claudio Monteverdi 一五六七〜一六四三)、カリッシミ (Giacomo Carissimi 一六〇五〜一六七四)、スカルラッティ (Alessandro Scarlatti 一六六〇〜一七二五)、バッハ、ハイドン、ヘンデルなど、一六世紀から一八世紀の音楽家の曲を、ルネサンスの名残を残すバロック空間に調和させようという意図ならば、フランスの様式上の不整合もいくらか理解できる。コンテ・ヴェルデ号の「コッペデ風バロック」になぞらえれば、フランスは「ベンチヴェンニ風バロック」とでも呼べるだろうか。

あらゆる言論が封じられていた一九四一年の日本において、ルネサンスや西洋クラシック音楽は、左派知識人の思想的避難所として機能していた。この頃、中井正一は帝国学士院から研究費を得て、「日本精神史における気——機の基礎的研究」に没頭していた。彼は下鴨の書齋の壁に、ミケランジェロの「敗者の像」と、中宮寺の弥勒菩薩の写真を貼った。そして口癖のように「日本はルネサンスを通過しなければならぬ」と言い続けた (徳村杜紀子談)。

ルネサンスの歴史的意義は共産主義者からファシストまで認めるところであり、抵抗のシンボルとするには、あまりに曖昧に過ぎた。そればかりか、一步誤れば体制擁護の記号に転落する恐れもあった。それは京都学派や、三木清の参加した昭和研究会が辿った道である。

中井もその危険性は痛感しており、ルネサンスの遺産を部分的に受け継いだロマン主義に同様の危機があったことを「美・批評」の中で論考している。

この論文ではロマン主義の歴史的な考察とその自由主義に対する「両義性」を考察しているが、イエナ大学を去る「自由主義者」フィヒテを「瀧川事件」と重ねロマン主義の民族主義への傾斜も比すなど関心は当時の情勢にある。中井はロマン主義を改革か反動かではなく「歴史的に一回的」な「転換、変容、転身の過程」、すなわち「個人の解放」から「民族の血」への復帰、封建制の破壊と古代汎神論への回帰という二面性を指摘する。そしてその「文芸復興」と「宗教改革」を混交した運動がやがて「世界中の多くのブランドンブルグ侯」によって、「各民族の血に訴えるような棟撃に対して誇張と感潮を準備」される点で「一九三四年度にも不足はない」と述べる。⁵⁰

社会主義者や自由主義者の相次ぐ転向を目の当たりにしてきた中井らは、ルネサンスにぎりぎりの歯止めを見出し、かろうじて自分達の思想的崩壊を防いだように見える。フランソアのルネサンス的空間は、このような背景で成立したのであった。

豪華客船公室を模した理由を改めて考えれば、やはり立野やベンチヴェンニらは客船に対する憧れを抱いていたのだろう。前に述べたとおり、賀茂丸で洋行した土田、小野、野長瀬らは皆、立野の師

であった。藤田嗣治、河上肇もまた、賀茂丸の同型船・三島丸（一九〇九竣工、八、五〇〇総トン）などでヨーロッパに渡っている。⁵¹ ベンチヴェンニ、マライーニも客船で来日した。欧州航路なくしてフランソアはなかったのである。

さらに付け加えれば、船員は自由主義や労働運動の担い手である場合が多かった。小林多喜二の「蟹工船」には、ストライキに真っ先に賛同する船員や、（結局は役に立たないが）漁夫の境遇に同情的な船医、監督の横暴に眉をひそめる船長などが描かれている。コンテ・ヴェルデ号の船員に社会主義者が少なくなかったことも前に述べたとおりである。狭い船内で働く熟練船員が組織労働者となり、世界の情勢に通じた外洋航路の高級船員がリベラルな雰囲気帯びるのは必然であった。

一九二七年、天洋丸はアメリカから一二、七三九体の親善人形を乗せて太平洋を渡った。一九〇六年から一三年まで同志社大学神学部教授を務め、京都帝大にも出講したシドニー・ギョリック(Sidney Lewis Gulick 一八六〇〜一九四五)が、アメリカ市民に寄付を呼びかけて実現した日米親善事業であった。⁵²

日本の港に着いた時

いっぱい涙を浮かべてた

私は言葉がわからない

迷子になったらなんとしよう

やさしい日本の嬢ちゃんよ

仲良く遊んでやっつくれ

最初に日本人は、その人形の数の膨大さに圧倒された。次に、人形達の可憐な青い目に深く魅了された。アメリカという国の圧倒的な豊かさ、そして彼らの人道主義の堅固さ。日本人の多くは、三年前の移民法改正時の怒りをほとんど忘れていた。恐らくこの時の天洋丸ほど、国際協調主義を体現した外洋客船はなかったであろう。そして一九三三年の満州国樹立によって日本が完全に孤立するまで、いましばらくは日米親善が演出されることになったのである。

しかし、いかに船が世界の文物と友好を運ぼうとも、海運の存立が対外権益に——それも非常にしばしば植民地経営に——依存していることに変わりなかった。国が帝国主義を歩む時はその先兵となり、国が戦争で滅びる時はその道連れとなるのが海運業の宿命であった。

第四章 参考文献

- 1 野間恒「豪華客船の文化史」NTT出版、一九九三年、一六四～二〇八ページ
- 2 Swigum, S. and Kohli, M. "The Ships List: Ship Descriptions -C" <http://www.theshipslist.com/ships/descriptions/ShipsC.html>
- 3 「船のウェブ・サイト」Italian Line 編 <http://www.interg.or.jp/white/ishiyama/column43-6.htm>

- 4 "Currency Exchange Rate vs. 1 USD, 1930-1939" <http://www.paper-dragon.com/1939/exchange.html>
- 5 鉄道省編纂「汽車時刻表」第十卷、第一二二号、日本旅行協会、一九三四年、二一九ページ
- 6 日本銀行Q&A「企業物価戦前基準指数」 <http://www.boj.or.jp/oshiete/history/11100021.htm>
- 7 Giovanni Giotta & Kristen Jensen, "Giovanni Giotta---Song of the Fisherman" <http://www.istrianet.org/istria/people/biographies/giotta/giotta1.htm>
- 8 ヒルトン、ジェームズ著、増野正衛訳「失われた地平線」、新潮社、一九五九年
- 9 ベンチヴェンニ、アレックスandro著、黒滝千恵子訳『ある皇帝の変身譚』と『ニールカント鳥変身譚』について「イタリア学会誌、第一七号、一九六九年、八〇一九ページ
- 10 「東北帝国大学一覽」一九三九年、四三八ページ
- 11 同、一九四〇年、四五七ページ
- 12 「東北帝国大学一覽」一九四一年、六五八ページ
- 13 「京都帝国大学一覽」一九四一年、三五四ページ
- 14 ベンチヴェンニ、アレックスandro「日本のイタリア研究者によせて フィレンツェからの手紙」イタリア学会誌、第二号、一九五四年、七〇ページ
- 15 石戸谷滋「フォスコの愛した日本―受難のなかで結ぶ友情」風媒社、一九八九年、二六六ページ
- 16 Maraini, Dacia "Ein Schiff nach Kobe" Das Tagebuch meiner Mutter, Aus dem Italienischen von Eva-Maria Wager, Pieper Verlag GmbH, München, 2003, p.174
- 17 石戸谷「フォスコの愛した日本」(前掲)、三五六ページ
- 18 Maraini, Dacia "Ein Schiff nach Kobe" (前掲)、pp.7-40
- 19 同、p.41
- 20 「日伊文化交渉史」日伊協会、一九四一年、四六～五四ページ

- Stranngioli, Giuliana "Il Giappone" Garzanti, Milano, 1940, pp.1-97
- 「日伊協会史―一九四〇年―一九九三年の歩み」日伊協会、一九九三年、四〇ページ
- 同、pp.190-206
- 石戸谷「フオスコの愛した日本」(前掲)、三五ページ
- Mraini, Fosco "Meeting with Japan" translated from the Italian by Eric Mosbacher, Viking Press, New York, 1959, p.213.
- 同、p.233
- Mraini, Dacata "Ein Schiff nach Kobe" (前掲)、pp.172-173
- Mraini, Fosco "Meeting with Japan" (前掲)、p.234
- 同、p.235
- 徳富猪一郎「桜田事変」近世日本国民史、第四三巻、民友社、一九三六年、二三三ページ
- 同、四二〇ページ
- 同、四五二ページ
- 同、四七九ページ
- 同、三一四ページ
- 京都精華大学ギャラリーフロール編「浅野竹二遺作展」(前掲)、一三三ページ
- 中井正一「雪」暮しの手帖、第十五号、暮しの手帖社、一九五二年三月号、一一七―一一八ページ
- 渡部編著「京都地方労働運動史」、三月書房、一五三七―三八ページ
- 同、一五三九―一五四〇ページ
- 京大建築会「京大建築会会報」第一四号、一九四一年
- 同、第一五号、一九四二年
- 同、第一六号、一九四三年
- 石戸谷「フオスコの愛した日本」(前掲)、六十九ページ
- 山崎脩「昨日と今日とその次」芸大通信、第一〇号、京都市立芸

- 術大学、一九九五年三月
- 近藤史人「藤田嗣治『異邦人』の生涯」講談社、二〇〇三年、一八六ページ
- 内藤初穂「狂気の海」、中央公論社、一九八三年、四四ページ
- 山高五郎「図説日の丸船隊史話」、至誠堂、一九八一年、二二二ページ
- 「建築雑誌」、日本建築学会、第二二巻、第二六二号、一九〇八年一月二十五日、四一三―四一五ページ
- Mraini, Fosco "Meeting with Japan" (前掲)、p.235.
- ベンチヴェンニ著『ある皇帝の変身譚』と『ニラカクタ鳥変身譚』について」(前掲)
- 吉田正純「精神の明晰」『世界文化』集団の抵抗と学習 中井正一たちと「抵抗の学習」をめぐる諸問題(2)「京都大 学生涯教育学・図書館情報学研究、第三号、二〇〇四年、四八ページ
- 近藤史人「藤田嗣治『異邦人』の生涯」(前掲)、二三二ページ
- Gulick, Sidney "Immigration to the United States, 1789-1930" Open College Program, Harvard College
http://ocp.hul.harvard.edu/immigration/people_gulick.html